

トヨタ財団広報誌
[ジョイント]
創刊号
July 2009

No.1

【特集】

地域社会の仕組みづくり

地域社会の危機が叫ばれて久しい。グローバルな視点とローカルな活動をどのようにつないでいけばよいのか。「仕組みづくり」というキーワードをもとに、地域社会の抱える課題とこれからのあり方を考えてみよう。



幸せです

◎谷川俊太郎

風が吹いている
遠くに凧が揚がっている
私は病院のベッドの上
でも私は幸せです
他人の不幸を忘れていられるほどに
余命半年と言われた日も
ひいきのチームが勝つのをテレビで見て
そうとは気づかず私は幸せでした
これは錯覚だろうか
自分勝手な思いこみか
ぶきつちよで不細工で
仕事でもへまばかりして
馬鹿にされて女にふられて
おみくじで大凶引いて
拳句の果てに病気になって
やっと分かった ずっと幸せだったんだと
不幸には無数の理由があるけれど
幸せに理由はない
いまここで私 本当に生きています
雲を見て枕元の花の香りをかいで
私は幸せです

◎たにかわ・しゅんたるう

日本を代表する詩人。1952年に詩集『二十億光年の孤独』でデビューして以来、詩の他にも、翻訳、劇作、絵本、作詞など長きにわたり幅広い創作活動を行っている。トヨタ財団の第3回研究コンクールで選考委員を務めたこともある。

*この詩は、本誌の創刊のために、特別にご寄稿いただいたものである。

JOINT July 2009
[ジョイント] No.1

Photo by Tsumoru Inamasu

今号の表紙を飾るのは、長崎県諫早市の「諫早灯明」の写真。この灯明ウォッチングは、福岡市の「博多まちづくり」イベントの一環として始まったものですが、現在は地域の垣根を越え、全国各地へと広がっています。無数の灯明、その一つひとつの明かりに、地域社会の再生と人々の幸福への祈りが込められているように見えます。

CONTENTS

FIRST WORD ◎ 詩/谷川俊太郎

幸せです …… 3

特集：地域社会の仕組みづくり

地域社会プログラムの総括・改定を振り返って

具体的・持続的な成果を産出するために …… 4

座談会 in 福岡

理想的な地域社会のあり方を探る …… 6

2008年度地域社会プログラム助成対象決定

プロジェクトとの出会い、
そして大きな広がりへ向けて …… 12

地域社会プログラムマップ …… 14

Relay Essay ◎ 朝岡康二

世代と世代の新しい連携を求めて …… 16

JOINT ホット・インタビュー ◎ 筒井 功

論文の向こう側へ …… 18

[温故知新]身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」①

新しい風を起こし続けて …… 20

活動地へおじゃまします!

最先端農法で炭が地球を救う!? …… 24

トヨタ財団ジャーナル …… 26

Photo Mail from Grantee

水牛たちの昼下がり …… 31

*本誌は地域社会プログラムニュースレター『Join人』を、企画コンセプトおよび内容を一新し、体裁・誌名ロゴを変えて、トヨタ財団の広報誌として新たに創刊したものである。

❖ 創刊にあたって

トヨタ財団の広報誌『JOINT (ジョイント)』創刊号をお届けします。

トヨタ財団は「人間のより一層の幸せを目指して」を理念として掲げ、1974年の設立以来、生活、自然環境、社会福祉、教育文化等の多領域にわたり、その研究ならびに事業に対して助成をしてきました。そしてまた、助成にあたっての私たちの考えや活動のご報告を、いくつかの刊行物などを通じて行ってまいりました。

しかしこれまでの広報活動は、近年ますます複雑化し不確実性の増す時代への対応としてははげっして充分とはいえず、より社会に開かれた総合的かつ定期的な広報誌の発行が必要との声が財団内外から高まってきていたことも事実です。それは公益法人としてトヨタ財団の役割が一段と重視されるなか、統一された方針のもとに各プログラムの連携を図り、これまで以上に助成対象者と、そして社会全体とのつながりを強固にする必要性が生じていることの現れであるともいえます。

そのためには、なによりもまず、トヨタ財団のことをできるだけ広く、多くの方々に知っていただく必要があります。財団の活動を紹介すると同時に、多様な視点からのオピニオン(見解、考え方)を持続的に社会に発信し、読者のみなさまからのさまざまなご意見に耳を傾けること。それは一般市民の認知を得、社会の抱える問題・課題の共有化を図ることが、より有効な助成とその成果につながり、ひいては文化・経済の活性化に結び付くと信じるからです。

本誌『JOINT』を情報交換や議論の場とすることで、「人間にとっての幸福」とはなにか、「くらしといのちの豊かさのために」私たちになにができるかを、さまざまな立場や領域を超えてみなさまといっしょに探り、考えていきたいと思えます。本誌が各種の研究や社会貢献事業のきっかけ、「知」の涵養と実践のためにわずかながらでもお役に立つことができればこれに勝る喜びはありません。

産声をあげたばかりの本誌に対し、今後の成長を見守り、末長くご指導とご鞭撻を、そしてご声援を賜れば幸いです。

トヨタ財団常務理事 加藤広樹

【特集】

地域社会の 仕組みづくり

くらしといのちを支え、育む、基本的な生活の場であり、
多様な人々がつながる場——地域社会。
いまその「地域」が、空洞化や荒廃の危機にさらされている。
私たちはこうした状況の改善を喫緊の課題として重視し、
地域社会に良き変化をもたらす具体的で持続的な
プロジェクトを支援する助成活動に取り組んでいる。
本号の特集では、トヨタ財団の活動概要の報告とともに、
地域社会の抱える問題点とこれからのあり方について考えてみたい。



——特集① 地域社会プログラムの総括・改定を振り返って

具体的・持続的な 成果を産出するために

●トヨタ財団地域社会プログラム

昨年度、トヨタ財団「地域社会プログラ
ム」は開始から5年目を迎え、プログラ
ムの改定を視野に入れつつ、それまでの助
成活動の見直しを実施しました。

そして、助成活動の見直しの結果を踏まえ
たうえで、スタッフ間で議論を重ねました。
改定に当たっては、はじめに地域社会の再生・
振興のため、トヨタ財団として、より主体的・

積極的に取り組む必要があり、持続的な作用・
効果のある、具体的な成果を生むプロジエ
クトを見出し、その担い手とのパートナーシッ
プの形成・強化を図ることが肝要であるとい
う考え方から出発しました。そして、プロ
ラムの考え方をより広く、わかりやすく伝え
るため、その狙いを絞り込み、メッセージ力
を高める必要性を認識しました。そのうえで、

主題の「仕組み」というキーワードは、
以前のプログラムのテーマが、重要な
メッセージがこめられていながら、やや漠然
とした「地域社会の再構築——支え合うくら
しといのち——」というものだったのに対し
て、それぞれのプロジェクトのめざす目標「仕
組みづくり」をテーマに盛り込むことで、求
めるプロジェクトの姿の可視化をめざしたも
のです。「仕組み」は、「地域に根差し」つつ「持

続的に機能」する「課題解決の仕掛け、シス
テム」と定義しました。地域における課題の
解決、さらには地域社会の再生・振興とい
うとても長い時間にかかる目標を実現するため
には、小さなものであれ、具体的に持続的な
「仕組み」を残し、蓄積することが大切な
ではないかと考え「仕組みづくり」をめざす
プロジェクトを積極的に求めました。

副題の「自立と共生の新たな地域社会をめ
ざして」については、仕組みづくりを通じて
どのような地域社会の実現をめざすのかを表
現したいと考え設定したものです。ただし、
あるべき地域社会の姿というのは、個々の地
域やそこに暮らす人々によって多様なもので
あり、明確な「像」を描き出すことは困難で
した。そこで、まずは、助成プロジェクトか
ら見えてきた地域の課題を整理し、それら課
題の解決を通してそれぞれのプロジェクトが
めざしている方向性の共通点を探ることにし
ました。

過去の助成を見ると、中山間地・農村の活
性化、障がい者・高齢者・外国籍住民等とい
つた社会的に弱い立場にある方々との共生、地
域文化の保全・継承など非常に多岐にわたる
テーマがあがっています。突き詰めてみると、
個々の地域がときに外とつながりつつ、その
特性を活かしながら自立的に暮らせる場とし
て機能すること、またそこに暮らすすべての
人々がそれぞれの能力や個性を発揮しつつ、
共に暮らせる社会が求められていることが見
えてきます。

一方で、現在の地域社会を見てみると、都

市化・近代化の中で合理化が追求され、そこ
に適合しない地域や個人は、とても弱い立場
に置かれる状況が生まれています。また、グ
ローバル化や情報化の中で、生活を彩る衣・
食・住や教育、文化までもが画一化されつつ
あるという状況も生まれています。翻ってみ
ると、それらが私たちの暮らしの豊かさを奪
い、そこに暮らす人々にとつて生きづらい社
会を築いているようです。それは、特に弱い
立場にある人や物理的に不便な地域におい
て喫緊の課題として出現しています。近年の
応募の中で、増加傾向にある「限界集落」の
問題は、まさにその表れなのではないでしょ
うか。

そこで、地域とそこに暮らす人々が自身の
個性や特性を存分に活かして「自立」しつつ、
一方で孤立することなく、他の地域や他者と
のつながりの中で「共生」することのできる
社会をめざすことが、より豊かな地域社会の
姿なのではないかと思うにいたりました。
以上のような経過を通じ、プログラムの
狙いを焦点化し、わかりやすく投げか
けることを試みましたが、なお多くの課題が
残されています。

具体的には、「仕組み」のイメージや要件
について、地域の特性に応じた多様性を前提
としつつも、より明確に描出し、プログラ
ムのメッセージ力を強化することが重要である
と考えられます。また、そもそも「仕組みづ
くり」とは、地域社会の再生・振興をめざす
一つの手法に過ぎません。果たして「仕組み

づくり」によって、どのような地域社会を実
現しようとするのか、「自立と共生」とは具
体的にどういうことなのか、その点も今後検
討すべき課題となります。また、めざすべき
地域社会のより具体的な姿を明らかにするこ
と、その実現のために、今日、そして明日、
私たちには何ができるのかその点についても
より明確な考えを持つことが求められていま
す。地域社会に良い変化を生じるプロジエ
クトを見出し、その成果を高める助成を実践す
るためには、これらの点について、より明確
に訴えることが必要だと言えます。

2009年度の地域社会プログラムで
は、助成プロジェクトの担い手の方々
を中心とした各地域で活動される人々との密
なコミュニケーションを通して、多様な地域
の姿を理解し、現実社会が抱える課題を見つ
め、それをプログラムに反映させることをめ
ざしています。

その具体的な方法として、2008年度後
半よりシンポジウムやワークショップを各地
で開催しています。こうした試みを通じて、
地域社会プログラムが「自立と共生」に基づ
く、より豊かな地域社会の実現に寄与できる
ものとしていきたいと考えています。

本特集では引き続き、2008年12月に福
岡市で開催されたシンポジウムについて、パ
ネリストらがある成果を振り返ろうと開催し
た座談会の様子を報告します。

理想的な

地域社会のあり方を探る

◎司会 田中恭一
(トヨタ財団シニアプログラムオフィサー)

池田郷

伊佐淳

稲舛積

大谷順子

古賀桃子

藻谷浩介

変な時代、

おかしな社会に
生きる子どもたち

司会 本日は、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。今回の座談会では、昨年12月に開催したシンポジウム「民が主役となった地域社会の実現へ——地域に根ざした仕組みづくりを考える——」の続編として、「理想的な地域社会のあり方」をテーマに、語っていただければと思います。

大谷 本題に入る前に、話しておきたいのですが、私は福岡市が進めている子どもの遊び場づくりの委員会に入っています。放課後、子どもの居場所づくり、安全に遊ぶ場所をつくろうという委員会が1年たち現在も続いています。委員会は、自治連合会代表、教育委員会等々の代表が集まって子どもの遊び場を議論しております。なんで、大人が寄ってたかって子どもの遊び場を議論するのか、本当に変な時代でおかしな社会だなと思います。国際的にも、OECDの2007年度の調査

によると、「子どもの幸せ感」が日本は特に低いとの結果がでていますし、ユニセフの調査でも、自分はひとりぼっちだと感じるのがダントツの一位でした。

稲舛 「商店街の活性化」をするために国土交通省、経済産業省、内閣府等、ありとあらゆるところが、商店街はコミュニティのインフラだからいいながら、制度としてしか取り組んでいない。昨晩も、県の関係者と話しましたが、彼らも何にお金を使っているの

かわからないのですね。国レベルでよってたかって、成功モデルをつくりだそうとやっているけど、自立自活してやっている商店街が存在しないのではないか。一方で、主体となる振興組合も頼りにならないですね。思考が停止してしまっており、自己目的化も甚だしく、しかも経済価値一辺倒なので、役員の意識改革が必要だと思います。

藻谷 子どもの居場所づくりの話ですが、大人はついつい善意の指導や管理をしますの

で、子どもは逆にそれを居心地悪いと感じます。もっと悪質なのが子どもを経済の道具にする教育産業。少子化社会ですから、少しでも絞りとりたいため、お受験モードを盛り上げ中流の親の恐怖感をあおって、塾通いに過剰に時間とお金を使わせる。一方で、最近あった女の子が「ベランダに放置」された悲惨な事件のように、貧困家庭でネグレクトされる子どもも多い。自然に子ども同士集まって自由に遊ぶ環境づくりが必要です。

池田 将来の先行きが見通せない状況で、同級生に商店街の長男がいます。彼らが何を

やっているかという、勉強のできる人は医者、弁護士、公務員、薬剤師になったりしている。息子たちをそういう職業につけて、親父さんたちは死ぬまで商店街の仕事をしている。しかしまた、親族の子に商いを継がせ、そこで商売をし続けるという価値観を持っている人もいます。悪く言うと、役職的な名譽職を欲している人もいるのかもしれないが、昔から続いている「人と人のつながりはきれいな」という気持ちは彼らに少なからずあるようです。こうした気持ちの部分には、案外、大事なところだと思います。でも、行政の商店街支援策は、稲舛さんが言われるように、あくまで商店街がもうかる経済の仕組みの範疇から抜け出せないようです。現場を回っていて実感しています。

昔からの

地域の知恵をヒントに

司会 さて、世の中がおかしい、もしくは経済優先社会の限界といったご指摘を皆さんよりいただきました。同時に、新しい価値観を持つ必要があるのご意見もあつたかと思えます。なかなか難しいかと思いますが、「地域社会」を良くしていくための、何かいいアイデアがあつたら教えてください。

大谷 子どもへの支援活動の経験を通じて感じたことですが、従来の活動は、子どもが安心してそこにいられるという状態が中心課題になっていったと思います。しかし、そこにいる子どもを「見張っている」ようでは、子ど

もにとっては、さっぱりおもしろくない。本当に子どもを育てる場合は魅力的なところであるべきです。あるモデル事業を見に行く機会がございましたが、何となく大人が見守る中で子どもがぶらぶらしている。所在なげ、夕方までいなくてとはいった感じが伝わってきました。子どもにも魅力のある場を作ること、その内容を深めていくことが大事です。楽しかった経験が、大人となった後に、今度は支援者として活動にかかわることにも、良いかたちでつながるのではないのでしょうか。

古賀 私は現在、仙台、金沢、京都、福岡をフィールドにした、某企業の周年事業として、次世代育成のためのプロジェクト「子どものためのNPOと児童館の協働事業」のコーディネートを担当しています。今年で3年目になりますが、児童館職員の多くはベテランぞろいで、これまで自分たちで児童館の活動の大半を担ってこられた方々ばかり。しかし、NPOとの協働を契機に、NPOの専門性を高く評価されたり、地域を巻き込むスタンスを重視されるようになったりと、いろんな変化がみられるようになりました。言葉は悪いが、子どもを使って、大人や地域が変わっていく。子どもたちがワイワイしている、それだけで、大人の関心も集まるし、地域がパッと明るくなりますよ。

子どもの背中を通じて地域のことや世の中のことを見るような仕組みを、というと大げさですが、そういう環境づくりというのが、とっかかりとしては、いいのではないかと思いますし、まさしく「民」が取り組むことに



まちづくりイベントの数々 (写真提供: NPO 博多まちづくり)

意義があることではないでしょうか。

池田 仕事柄、さまざまなNPOや団体取材しており、地域社会のあり方をテーマに記事にしてみました。結局「つくりもの」に近い組織はうまくいかない。今日ここに持ってきた新聞記事は「大棚商店」という、鹿児島県の奄美大島で株式会社スタイルで経営している過疎地のお年寄りが通う店のことを取材しています。車がない人はスーパードに行けない。そういった方の身の回りの品物を地域の住民の要請で販売している。株式会社だけど、儲けはほとんどない。ちよつと定価より高いけど、地元の高齢者が利用している。

ベンチが店の前にあり一日に何度も来る人がいるんです。朝ごはんのお豆腐、お昼のお惣菜、また夕方にもやってくる。これも、みんなが車を持ちはじめたころ、かなり経営が苦しい時期があった。しかも、車社会になると、若者も外に働きに出て行ってしまう。これは奄美でもかなり田舎の方なんです。そうするとお年寄りだけ残された集落ができあがって、さらにその人たちが高齢化しても、そこそこ経営が成り立っていくという不思議な経済の現象が起こりつつある。完全な民間の動きで、ここには行政が絡んでいない。こういったところからヒントがいくつか出てくるのではないかと。若者の雇用も生まれている。身近な、昔からあるやり方なんです。そんな地域の知恵の中にこういう時代だからこそヒントがあるのではないかと。ちよつと皮肉めいて書いてはいますが、業績が右肩下がりでも、株価が暴落するのでもない。やっぱり、

い。まったく合わないので匙をなげている行政職員もいます。役所のセクションも別々なので、同じ取り組みが両方別々で進行しているといった弊害もあります。

一方で、一緒にやることのできた事例として、佐賀県における防災訓練があります。これは、防災の知識をもった地元のNPOと地元住民、町内会が組んでやりましたが、そこそこ好評を得たことでした。防災は共通の利害関心でもあり、しかもどういったことをNPOが提供できるかを、具体的に見せることができたことが成功の秘訣だったようです。小さな成功かもしれませんが、やり方としてひとつ参考になるかと思えます。

大谷 地域とNPOの接点でのひとつの事例です。福岡市が進めている先の子ども遊び場づくりに関する話です。子どもの安全の確



●藻谷浩介 株式会社日本政策投資銀行参事役、DOB「シンガポール・シアードバイザー」
1964年、山口県に生まれる。日本の市町村のほぼすべてを訪問し、地域特性や郷土史を詳細に把握。統計データと現場の実情を照らし合わせつつ、地域活性化戦略を提示している。2007年の著書『ニッポンの地域力』(日本経済新聞社)が好評。



●大谷順子(特定非営利活動法人子どもNPOセンター福岡・代表理事)
長男の出生を機に福岡のテレビ局を退職し、1966年に「子ども劇場」の立ち上げに参加する。以来「子どもが健全に育たない社会が、本当に健全な社会と言えるのか」との問題意識で、子どもをテーマに支援活動を展開し社会を見続けている。

今の経済の仕組みを考え直すヒントになるのではないかと思ひ、新聞で紹介しました。

藻谷 自分は山口県の工場町の、商店街がない郊外住宅地で育ちました。東京で結婚しごちやごちやした街に住むようになって、ようやく商店街のあるコミュニティというものを知ったのです。

今回家族で海外に引越したのですが、最後の日に地域の人たちが送ってくれた。今どきこんなことがあるのかと、この歳になって初めて、地域社会のありがたさを知りました。特に長年子どもの成長を見守ってくれていたお店の方たちが、別れを惜しんでくれました。商店で物を買うことが人をつなげるという、この記事に書かれていることは、今だからこそリアリティをもって納得できます。

伊佐 この記事でもおもしろかったのは、大棚保という問題がありますが、いつまでも子どもを閉じこめていては身体が育たない。また、遊ぶことでコミュニケーション力、生きる力を育むといったチャンスも奪ってしまっている。これまでは、放課後の学校を安全な場所として、地域の保護者が見守る中で、子どもたちが時間を過ごす場としてきた。しかし、魅力のある場所ではないので、子どもたちが集まらない。このため、積極的な新しい仕掛けが必要ということになり、地域において専門性をもったNPOに相談することとなります。NPO側も、子どもが健全に育つというテーマを中心に地域課題に取り組むこととなり、NPOの専門性がどのように活かせるのか、興味深い展開になってきました。

稲舂 コンサルタントと比較するとわかりやすいと思います。彼らは、商店街活性化などで「コンサルやれば」くらいの話でしか考えていません。コンサルは「来なくて(コン)、去っていく(サル)」。無責任な個人が組織の名刺を持っているだけというのは、言いすぎかもしれません。本当に必要なのは「ちゃんと活動している(オル)、その場に来る(クル)」。「オルクル」なのが、まさにNPOではないでしょうか。

古賀 私のセンターでは、この3年間、福岡県内を巡回してNPOの運営に関するセミナーや、多様なセクター間の「協働」を主題としたフォーラムを行っています。県内各地の様子を通じて、この1、2年でNPOの活動が再び活性化しているように感じています。草の根の人たちは、自分たちが先んじて着

商店は老人ホーム、託児所、公民館も兼ねているという箇所です。異世代交流の場にもなっているのです。中心はお年寄りなのですが子どもも引き寄せており、なにか魅力があるのです。

地域に希望を与える NPOの役割

司会 地域社会づくりにおいては、「子ども」、「買い物」が起爆剤になる、地域の中で人がつながるきっかけとなることがあげられました。また、NPOによる活動も、そのための後押しをしているとお話もいただきました。NPOの重要性は、助成金プログラムの運営を通じても感じていることでもあります。

もちろん、NPOだけが地域社会づくりの担い手ではありません。この点は、昨年12月のシンポジウムでも、「行政、マスコミ等の他のアクターとの連携が重要である」との指摘をいただきました。その点もふまえて、コメントをいただけますか？

伊佐 一般に、個々人としての住民という言い方と、住民組織というのがあります。地縁団体、たとえば町内会、自治会、婦人会、老人会、子ども会という会としてやっているものがある。住民による新しい組織としてNPOが位置づけられる。

どこの役所に聞いても、たいていは、住民パワーを引き出すためには地縁組織もNPOも一緒にやって欲しいのですが、実際は「水と油」の関係なので、なかなかうまくいかない目している課題に、政策が後追いだったりすることに、どうも気付き始めたり、疑問視し始めている。そして「このままではいけない」、「自分で何かできそうだ」、「とりあえず行動から」という気運になっっているように思います。個人レベルでも、不安感や悲観、強い問題意識のようなものが、「社会や地域を良くしていこう!」という強い原動力につながる傾向が強まっているように感じています。

大谷 NPOの実績だと思います。願望や、理想論だけを言っているのではない、新しい動きをつくり出してきていると思います。その事実にもつと光をあてるべきです。人が希望をもてる社会でないと、社会は活性化しない。これは、子どもだけでなく、大人もそうだと思います。「地域を良くするための資源はどこにあるのか?」という姿勢で、社会を



●古賀桃子(特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター・代表)
学生時代に福岡市都心部のコミュニティ再生活動に携わる。2002年に「ふくおかNPOセンター」を設立。「草の根から、社会を描く」を合言葉に、相談や研修、企業や行政向けの啓発・コーディネート等、多角的アプローチでのNPOの活動基盤整備を図る。



●池田郷（西日本新聞社編集局報道センター・記者）
1972年、熊本市に生まれる。2007年より、地域の再生と自立をテーマにした長期連載「わたしたちの九州」を担当。過疎集落、第一次産業の衰退、空洞化する都市およびベッドタウンの現場取材材について。

変えていこうというのが、NPOの立場ではないでしょうか。

池田 集落力というシリーズで、福岡のある山間の町に官庁からきた若手キャリアと話した時、「統計は政策の羅針盤」だといっておりました。とても印象的だったので、彼はこの町に関する統計なんてみたことがないのです。都道府県レベルの大きい数字、つまり市町村の数字については、まるめ込んだものしか見たことがない。まさにマクロレベルの話なのです。そうすると、多くの問題をかかえているこの町の商店街について、羅針盤となるような具体的政策は出てこないのではないかと思います。

藻谷 本当の問題は、地域社会というミクロレベルで生じています。そのことは現場では共有されてきているし、問題に対処するNPOではないかと思えます。

稲舂 そのためにも、住民は、よりリアリティを持つことが大事ですね。思考力も必要となってくるのではないのでしょうか。また、世のため、人のためといったロマンを持つことも大事でしょうね。

古賀 確かにそのとおりだと思います。ともあれ、現実問題として、子ども会、自治会等といった、既存の地縁組織への参加が全国共通して減ってきている。そうした地域活動の現場の実情を背景に、行政はコミュニティ政策を問い直す傾向を強めており、また、地域の既存の組織やキーパーソンも、これからの地域像や、地域運営のシステムをどう描くかに意識が向き始めています。

一方、「サイレント・マジョリティ」という用語もあるように、「いかに参加を促すか」とか「自ら主体的に担っていくか」といった議論と、実際に住まう大半の人たちの動向との間に、もの凄いギャップを感じています。「参加」ないし「参画」という行為は、確かに何事にも大切な行為ではありますが、一般市民にしてみれば、とりわけ、地域社会と接点を持つことは、まだまだハードルが高い行為だとも思います。地域の団体も、仲間を増やすために、受け手にリアルな実感が伴うように、PR活動や、参加・体験しやすい仕掛けを工夫し、関心や共感を持つてもらおうこと

などの活動は年々増えています。しかしテレビがそれを報道しない。「希望が持てない社会」というメッセージ、悪い話ばかりを紹介しているように感じます。

池田 西日本新聞の読者室には、「明るくなるような話をもっと紹介してほしい」との要望が多くなります。個人的には、経済的な尺度だけではなく、個々の「地域社会の幸せ」を測れるような地域に固有な「ものさし」をもつことで世の中が、多少は明るく見えてくるのではないかと思ひ、そうした話をどんどん紹介できればと思います。

人と人をつなぐ 「文化」を見直す

司会 やはり、異口同音に「NPOは、地域社会づくりにおける重要な担い手である」とことが指摘されたかと思ひます。さて、本題である「理想的な地域社会のあり方」について、お話をいただければと思ひます。皆さんが、地域社会に対して求めているものは何でしょうか？

伊佐 経済が効率化を求め、生活にも分業化が浸透してしまいました。その結果、「他人任せな」、「失敗を認めない」社会が形成されてしまっている。そして、「失敗を認めない」社会であるために、「何もしない」社会に陥っているのではないか。このことは、地域社会においても観察できるように思ひます。

稲舂 そうした環境下では、地域に「文化」は育たないと思ひます。ここで言う「文化」は育たなければならぬと思ひます。

大谷 「参加」ということの難しさは、確かにありますね。そう考えると、ボランティアというのは、重要な鍵になるかもしれません。ハードルを低くしておけば、誰でも参加しやすくなります。個人的には、多くのボランティアに活動を支えていただいております、その存在の重要性を実感しています。

伊佐 大人も楽しめる。自分も楽しめる。受け入れられていることを実感できる。それが理想的な地域社会ではないでしょうか。だから、大人が忙しすぎる社会というのは問題で



●伊佐淳（久留米大学経済学部・教授）
1962年、沖縄県に生まれる。地域づくりに果たすNPO、コミュニティビジネスの役割、NPOと行政・企業との協働、中間支援組織の機能と役割をテーマに、実践につながる研究活動に従事。2008年に、『NPOを考える』（創成社新書）を刊行。



●稲舂積（特定非営利活動法人NPO博多まちづくり・理事長）
1950年、博多に生まれる。建設会社を運営する傍ら、1982年より博多存亡の危機感から「まちづくり」にかかわる。灯明ウォッチング、道路空間社会実験、「美野島まちづくりショップ」の開設などの活動を実践。博多祇園山笠大工でもあり、博多文化の中心人物の一人。

とは、地域固有の「みんなで仲良く暮らす」知恵のことです。そして、地域社会とは、住民が「文化」を共有している範囲のことをさしていると思っております。もちろん、そこには、ルールも必要となります。博多には「人民裁判」もあるのですよ。

伊佐 日本は、戦後、「何もない社会」から抜け出し、物質的な「豊さ」を求めてきました。そのことは一応実現できたと思ひます。しかし一方で、失ったものも少なくない。たとえば、他人とコミュニケーションをとることができない人、地域の中で友だちを作れず孤独を感じている人々が増えてきているように感じています。これもある意味で人と人をつなぐ「文化」の衰退といえるでしょう。

大谷 地域社会を良くしていくためには、やはり生活の「地に足をつけた」住民から変え

稲舂 私の育ったところは、博多のど真ん中で、山笠、どんたくがあります。また、美野島商店街のような、昭和の雰囲気があり人間的な広場性のある空間もある。外から見ると大人がおもしろく、楽しくやっています。そういう場には必ず子どもが主役です。山笠は年寄りになるまでみんなやっていきますから、街中でもそんなに心配しなくても大丈夫です。要は、大人が楽しんで生活していれば、子どもも健全に暮らすことができるのではないのでしょうか。

藻谷 福岡は大都市ですが、今まで皆さんがあげられたように地域社会の良さがまだまだ残っているように思ひます。工業化せず、生活レベルで「分業化」が進行しなかったことが良かったのでしょうか。他の都市も見習うべきところ大ですね。

司会 本日のお話を要約すると、理想的な地域社会とは、住民がリアリティのある「文化」を共有しており、個々の役割分担を認識できている暮らしの場ということですね。そのためには、住民の参加意識が大切な要素となっているようですが、これはなかなかハードルの高い話で、そのための仕掛けが必要とのご指摘もいただきました。また、第一回目のシンポジウムを福岡市で開催させていただいた訳ですが、ここは客観的に見て理想的な地域社会のヒントが、まだ残っている場所であることも確認できました。おかげさまで、大変収穫の多い座談会となりました。

プロジェクトとの出会い、 そして大きな広がりへ向けて

●喜田亮子(トヨタ財団プログラムオフィサー)

助成金贈呈式

4月18日(土)トヨタ・オートサロン・アマラックス東京にて助成金贈呈式が開催されました。

贈呈式に先立ちミニ・シンポジウム「地域に根ざした仕組みづくりの実現に向けて」が開催されました。はじめに2つのプロジェクトの代表者、北山佳生さん(セーの!!海部郡)、村上真善さん(旧国鉄トンネル群保存再生委

贈呈式風景



員会)より基調報告が行われました。その後、報告者に加えて、2008年度選考委員、助成対象者宮人賢一郎さん(ながのエコシティブロジェクト推進協議会)、山本優子さん(しまなみスローサイクリング協議会)が参加しパネル・ディスカッションが行われました。「仕組みづくり」実現に向けての課題やヒントを参加者と共有することを目的として開催したのですが、その話題は仕組みづくりを巡る議論にとどまらず、「地域」

や「地域づくり」の本質に迫る展開となりました。選考委員からは、「NPOがどう地域を構築していくのか、人間同士の関わり方、自然との関わり方をどのように構想していくのか、その力が試されている」、個々のプロジェクトの成果が

が、都市にさまざまなものが集中し、多様な地域の存在が失われている現在の社会のありようが、私たちの暮らしの中で直面している課題の根幹にあるのかもしれない。

シンポジウムは、1時間半という時間の制約があったとはいえ、地域社会を考えるうえで貴重なヒントが多様な角度から提示されるものとなりました。

助成対象者ワークショップ

贈呈式翌日に開催された、助成対象者によるワークショップ。「めざすべき地域社会像の模索——10年後、50年後の地域社会への道」では、地域社会の抱える課題の多様性と地域社会が内包する可能性の大きさを再確認する場となりました。ことに以下の三点が議論の柱だったかと思われまます。

まず「地域の内外」という点では、「外から来る人を大事にするよりまずは、そこに住んでいる人を大事にする」ということを前提としたうえで「外からの気づきをどう村に採り入れていくかが重要」「長期的視点で外との交流を考えていかなければいけない」とい

2008年度地域社会プログラムは、「地域に根ざした仕組みづくり——自立と共生の新たな地域社会をめざして」という新たな基本テーマを設定し公募を行いました。新テーマによる初めての公募であり、「仕組みづくり」とは何か、「地域社会」とは何か、プログラムオフィサーの間でもさまざまな議論が展開しました。その後、年の瀬近く2008年12月下旬に選考委員長中村安秀(大阪大学大学院人間科学研究科教授)はじめ5名の選考委員が集まり、選考に向けて評価の視点の共有化を図りました。

選考委員会では、委員長を中心に、プロジェクトの選考にとどまらない、多岐にわたる意見が挙げられました。ここにその一部を紹介します。「行政の取り組みべき領域については、どう行政を巻き込み、つないでいくかが課題」、「営利性と非営利性についてどうとらえていくのか」、「長い実践の経験のあるプロジェクトは『知識化』し発信していくことが必要」、「プロジェクトの成果をアジアへ広げる道筋を模索したい」。以上、長時間にわたる議論の結果、地域社会プログラムの本体28件(助成金額合計1億819万円)、ユース助成20件(助成金額合計1000万円)が助成対象候補として決定しました。

うことが確認されました。

次に「地域の自治」という点です。辻英之さん(長野県泰阜村・伊那谷あじやね「支援」学校)は、戦後日本の公教育が、「村に戻ってこない若者を増やしてきた」と指摘し、教育の自己決定権を地域に取り戻すことが課題であると語りました。自治という観点では、「地域活動の中でどう資金循環を生み出せるか」ということも議論されました。

最後の点として、プログラムのテーマとつながっている「仕組みづくり」についての発言を紹介します。「仕組みとは、仕掛け。活動をどうストーリーとして描けるか。そのことが問われている」「みんなが同じベクトルに向かって動ける仕掛けづくり」「民主主義を作る。自治を取り戻す。公益とは何かを自分たちで考えること」「自分たちのまちはことは自分たちでやっていく。共通のよりどころとして『まちづくり憲章』なども仕組みのひとつ」「人、お金、組織をどう作り出していくか。個別のテーマのみならず広がりを持つた地域のランドデザインを」「50年、100年先を考えないといけないということ。資金循環、関わる人をどう増やしていくか」「仕組みの新陳代謝も重要」等々。地域社会プログラムが投げかけた「仕組みづくり」という茫漠とした課題が、個々のプロジェクトと出会い、広がりを持って展開しています。今後は、その行方を見守りつつ、地域社会プログラムとしてどう咀嚼し、具体化し、再構築していくかが大きな課題となりそうです。

No.	プロジェクトチーム	都道府県
24	長野俊英高等学校 郷土研究班とOB会	長野
25	旧国鉄トンネル群保存再生委員会	愛知
26	瀬戸窯業高校チャレンジフェスタ実行委員会	愛知
27	愛知県立旭野高等学校 EMC(軽音楽部)・音楽(吹奏楽部)・茶道部・合唱部・生徒会	愛知
28	再チャレンジ夢工房チーム	滋賀
29	プロジェクト保津川	京都
30	釜ヶ崎文化発信プロジェクト	大阪
31	多文化子ども共育センタープロジェクト	兵庫
32	しののめ山の芋チーム	兵庫
33	兵庫県立三木北高等学校環境研究部 ECO-P	兵庫
34	奈良県立磯城野高等学校 環境保全プロジェクト班	奈良
35	いんしゅう鹿野・空古民家再生プロジェクトチーム	鳥取
36	びんご多文化まちづくりチーム	広島
37	チーム「海の子・鞆の浦」	広島
38	山口県立田布施農業高等学校生物生産科畜産班	山口
39	山口県立日置農業高等学校 馬クラブとその仲間たち	山口
40	せーの!! 海部郡	徳島
41	しまなみスローサイクリング協議会	愛媛
42	いなか未来ネットワーク・プロジェクトチーム	高知
43	幡多学ことはじめ組	高知
44	子どもの村福岡・地域協働チーム	福岡
45	27H ドラえもんチーム	鹿児島
46	はえばる Youth	沖縄
47	ゆるやかネットワークを作ろう!	沖縄

各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブ・サイトをご覧ください。

2008 地域社会プログラムマップ

トヨタ財団地域社会プログラムの2008年度助成対象プロジェクト一覧

●は本体、●はユース、(特活)は特定非営利活動法人の略

No.	プロジェクトチーム	都道府県
1	サポーターステーション	北海道
2	北海道中標津農業高等学校園芸分会	北海道
3	クリエイト	青森
4	土沢地域活性化協議会	岩手
5	150年前の栗原の食復活プロジェクト	宮城
6	大島「カキの島再生」協議会	宮城
7	やまがた若者と地域社会再生支援ネットワーク	山形
8	えぎ・まち活性化プロジェクトチーム	山形
9	発達障害のある若者に「働く」をつなげるプロジェクトチーム	群馬
10	町田発・ゼロ・ウェイク推進協議会	東京
11	八丈島子供全員太鼓部会	東京
12	相武台高校・女子美術大学アートプロジェクトチーム	神奈川
13	湘南映像祭 ユースグループ	神奈川
14	ミニヨコハマシティ	神奈川
15	神奈川県立相原高等学校農業クラブ相っこプロジェクトチーム	神奈川
16	石川県立翠星高等学校バイオサイエンス研究会	石川
17	寺高吹奏楽部「Great Challenger」	石川
18	越前若狭!安心・安全倶楽部	福井
19	都市農村交流ふるさと元気プロジェクトチーム	山梨
20	御射里の会(みさとのかい)	長野
21	ながのエコシティプロジェクト推進協議会(事務局:(特活)CO ₂ バンク推進機構)	長野
22	伊那谷あんじゃね「支援」学校	長野
23	慶師千人村	長野

世代と世代の 新しい連携を求めて

●朝岡康二（国立歴史民俗博物館名誉教授）

私たちの日々の生活は、家電の普及や交通通信の発達によって急速に近代化が進んで、この数十年その驚くべき速さに翻弄されてきました。もちろん、生活の近代化にはプラスの側面がたくさんあり、そこから得られた豊かさを無視はできませんが、同時に失うものも少なからずあった、と思われれます。

よくいわれるように、昭和三十年代以降、農漁村から都市に仕事を求めて出てくる人々が急増し、山間や離島では過疎化が進行しました。その一方、都市人口は激増して、人々は集合住宅や郊外住宅のようなモダンで便利な、しかし人工的で画一的な場で暮らすようになりました。そして、そのような生活環境は、同じ年齢層、同じ家族構成のかたまりになっていました。

特に公営の団地は入居条件に収入・家族数などがありましたから、入居者が偏る傾向が顕著で、初めに幼稚園ができて、次に小学校、さらに中学校、中学校が満員になるころは、幼稚園児の激減が始まっているという、時間とともに生活環境も画一的に変わる機械的な変遷をたどることになりました。このような一斉の生活様式の成立が、没個性的な大量生産・大量消費の

この歳になって、あらためて家の周囲をながめてみると、荒れた老朽アパートは空室が目立ち、個人住宅は、つれあいを欠いた高齢独居者が目につき、若者はほとんど見かけません。そして、残っていた人が介護施設に入所してしまうと、空き家のままになってしまふところも少なくありません。その一方、周辺の畑をつぶした宅地開発が一斉におこなわれて、マツチ箱を集めたような住宅密集地に生まれかわっています。

通りは朝早くから犬の散歩でにぎわい、日中は介護施設の送迎車が行きかい、たびたびかかってくるお墓の勧誘電話など、一見、まことに平和な日常生活が続いているようにみえます。

しかし、冷静に考えると、そこにあるものは山間地や離島の過疎地と同じような、都市に生まれた限界集落であり、地域がそっくり老人施設になってしまった、といつてよい状態なのです。

この戸建ての郊外住宅の密集地は、公営の団地と異なつて、土地が私有ですから、微細に分割された私有地が錯綜して、地域全体に広がる計画的な住み替えや再開発といった現状変更が難しいのです。しかも、不在の縁者は日々増加して、利害ばかりが複雑になつて、現状維持以外の対策がますます持たなくなつていきます。

ここで重要なことは、このような暮らしの姿は、現在の高齢者の生活に限った現象ではなく、今は新開地に住を求めている若者たちの、将来の姿がそれに重なる、ということなのです。

だからといって、家族・親族が集まって暮らす昔の村落が成り立つわけがありません。そこで、家族や親族の再結合を求めるのではなく、世代間の断絶を解き

時代を可能にしたのです。「ニュータウン」と称して団地がさかんに建ったころ、東京郊外には、民間業者の宅地造成による戸建て住宅の密集地もたくさん生まれました。

これらの人々の子どもたちが成長して家を出ると、親と同じように新しい地域で新しい生活を始めて、もう戻ってはきませんでした。こうして、大都市では世代ごとの別住・別生活が一般化して、家族・親族はばらばらに暮らすようになり、それは結果的に、世代ごと地域を分けて、それぞれ異なった生活を営む、という暮らし方を定着させることになりました。

世代が別々に暮らす生活スタイルが一般化して制度のようなものになってしまうと、若年層の恒常的な移動と新居住地の獲得が不断に必要になり、同時に古い住宅地の老化の進行さらにはその解体が、絶えず繰り返されていくこととなります。都市の生命活動を支える細胞の増殖と死滅、といえば、そうとも言えるでしょう。

実は私も、昭和三十年代以来、この種の郊外住宅地に住み、そこからたびたび単身赴任を繰り返して今日に至った者です。

ほぐす社会的な新しい方法が、なにかありはしないかと模索するのです。

なんらかの方法で、世代を超えた付き合いや集まりが生まれるならば、まだら色に分布する世代ごとの居住地のあいだにも交流が生じて、暮らしを形作るものは、なにも経済的合理に限るものではないことが明らかに、と夢みるのです。

一二十年ほど前まで、私の周辺にあつたさまざまな結社（和歌・俳句・同人雑誌その他もろもろ）は、多様な人々を含んで広い年齢に及び、ほとんどが非経済的で自主的な活動でした。これに対して今日の私たちは、職業や世代ごとに分かれて暮らし、その集合はそれぞれ等質化したマスとしてあつかえるものになつていて、人々の付き合いはその集合範囲に限定・完結していることが多いと思われれます。

当然ながら、古い結社の再興とはいきませんが、それに替わる新しい形の世代にまたがるネットワークはできないのでしょうか。それはなにも、有用なものである必要はないが、職域や経済活動から離れたものであつてほしいと思います。

まずは若者から連携を呼び掛けてほしいのですが、このような期待に応える「世代横断型のネットワーク形成」の試みへの助成を大いに期待したいのです。

●あさおか・こうじ

1941年ソウル生れ。1986年沖縄県立芸術大学美術工芸学部デザイン工芸学科教授、1990年国立歴史民俗博物館民俗学部長、2000年同研究部長を経て、2003年沖縄県立芸術大学学長などを歴任。また、道員学会、日本民員学会会長なども務める。著書に『鉄製農具と鍛冶の研究』（法政大学出版）、『日本の鉄器文化』（慶友社）、『南島鉄器文化の研究』（深水社）など多数。トヨタ財団評議員。



INTERVIEW

筒井功さんは、現在タイ・カセサート大学水産学部の特任研究員として、主に東南アジア沿岸部をフィールドとした研究活動を行っている。本プロジェクトでは、特にタイ沿岸部における海藻の生態調査および総合的な海藻図鑑の作成を目的とした研究を行った。4月に一時帰国した筒井さんに話を伺った。



助成対象者／筒井 功

論文の向こう側へ

「ネバー・ギブ・アップ！」

●聞き手：楠田健太(トヨタ財団プログラムオフィサー)

海藻図鑑『海産植物図鑑』、すばらしい出来栄ですね。お疲れさまでした。
ありがとうございます。今のところ図鑑に収録している海藻・海草類は100種類くらいですが、できれば200種類、最低でも150種類くらいまで増やしたいと思っています。少なくとも今のレベルではまだまだ出版なんてできないですね。ただこればかりは日々変わる海の状態と相談しながらの撮影、制作となるので、あと2〜3年くらいはかかると思います。完成したら、タイの教育現場などで使ってくださいという所があれば、無償で差し上げたいと考えています。
そもそも筒井さんが、海藻の研究に興味をもたれるきっかけとは何だったのでしょうか。

熱帯沿岸の研究、といえばだいたいマングローブとかサングの研究をイメージされることが多いと思います。一方、海藻といえばおそらく地味で暗い、というイメージが付きまとうのではないのでしょうか。実際私が研究を始めた頃も、よくそのように言われました。でも実際に海に潜って見る海藻と、陸に上げられ標本として見る海藻というのは、色彩も形態も全然違うんですね。海の中で直に見る海藻というのは、もうサングにも劣らないくらいキレイなのです。昔学生だった頃、そのあまりの違いに愕然としたことがあります。それでいて沿岸の人々の生活と密接につながっている。この図鑑はかつての私のような、出来の悪いダメ学生でも利用できるような配慮して作った、といえるかもしれません(笑)。

タイは海藻や海草類の宝庫ですが、これまで網羅的な生態図鑑、というのにはなかった。私のような、分類学の専門家ではないからこそできたのではないかと自負しています。
ここに収録されている写真、すべてご自身で撮られたのですか？

そうですね、海が好きなので。潜るときはスキューバダイビングではなくてシュノーケリングのみです。足ヒレやウェットスーツも着用しません。今回作成した海藻図鑑も、普通の人が潜って見られるものを収録したかったのです。スキューバダイビングというのは現地の人々にとっても高額なものです。この機材を身に付けて海に潜らなければ見られないようなものを載せる、というのはやはり違うと思うのです。現地の普通の人たちの視点を大切にしたいと考えています。

現在のアカデミズムでの評価のあり方について、ご意見はありますか？

研究者である限り、論文で評価されるのは当然だと思います。ただ、学術論文というのは基本的に研究者のための情報提供に過ぎません。私としては、それが誰のためなのか、また、じつさい何の役に立つのかということもいつも念頭においておきたい。つまり、これまでお世話になってきた東南アジアの人たちのことを忘れずにいたいです。

たとえば、私のもう一つの専門であるエビ養殖の技術について、資金力を持つ一部の養殖業者さんだけでなく、伝統的な知恵も用い



ウミヒルモ *Halophyla ovalis* (『海産植物図鑑』より)

筒井 功 (2006年度研究助成プログラム助成対象者)
【題目】タイにおける藻場の生態調査ならびに海産植物図鑑の作製——生命のゆりかごを守るために
【助成額】630万円(2006.11~2008.10)
【助成概要】海藻・海草類の群落である藻場は、魚介類の産卵場・孵化場・餌場・隠れ家等として、また漁場等として、生態的にも社会的にも重要な役割を果たしている。しかし熱帯の藻場に関しては、学術的関心度や観光の注目度の低さ等から、ほとんど研究が行われていない。浅所に発達する藻場は開発の影響を受け易く、東南アジア諸国の中でも近代化の進んだタイでは藻場環境が危機的状況にある。本研究ではタイ沿岸の藻場について調査を行い、生態的・社会的な視野から総合的にその役割と重要性を明らかにする。さらに生態図鑑を作製して、タイの藻場保全や環境教育に草の根レベルで貢献する。また得られた知見を東南アジア全体の沿岸環境問題にも役立てたい。

てどんな人にもその技術が利用できるように、「東南アジアの零細業者さんのための」という視点を重視し研究に取り組んでいます。もちろん「そういった研究は学術性が低い」とか「現場指向性の高い研究は、学術論文になりにくい」と言う研究者の方々も多いのも事実ですが、私は、これまで学んだ知識

や知恵を誰もが利用できるようにしたい。学術論文の向こう側、つまり暮らしの現場に研究を活かし、現地の方々に現地の言葉で伝えるべくことが大切だと思うのです。
なるほど、徹底していますね。

毎日のように海に潜っていると、沿岸や海中の環境は荒れてきているなというのを肌で感じます。海の中の世界、そして沿岸の住民の生活と直に結び付いている海藻・海草類を、子どもたちの世代も含めてもっと興味をもってもらえるようにしたい。その意味で、この図鑑も後々は絵本みたいにしてもいいかもしれません。

まだまだタイにいらっしやるのでしょうか？

助成を頂いた頃は JIRCAS (国際農林水産業研究センター) の特別派遣研究員という立場だったのですが、契約期間が満了した後には、JIRCAS から研究委託を受けながら、カセサート大学の客員研究員(無給型)として在籍し研究を続けています。ただこの研究はある程度長期間、海の現場に張り付いているとできない研究なので、日本で職を得てたまたまタイに来る、というわけにもいかないんですね。

納得できる成果を出すまでは、タイ伝統古式マッサージを学び、マッサージ店を開くとかして(笑)、なんとしてでも研究を続けたい、なんてことも半分冗談で考えます。自分のモットーは「あきらめない」ということですから。

新しい風を起こし続けて

●加賀道(トヨタ財団プログラムオフィサー)

トヨタ財団は1974年の設立以来、時代に応じてさまざまな助成プログラムを立ち上げ、助成を行ってきた。この連載企画では、財団がこれまでに実施してきた助成プログラムにもう一度光を当て、当時そのテーマに取り組んだ背景や、助成終了時には見えてこなかったプロジェクトの成果、社会へのインパクトを改めて見直してみたい。



助成当時の記念写真(選考委員とともに)

第1弾として、身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」(1979年〜1997年、全7回)を取り上げる。本プログラムは、助成形態としては珍しいコンクール形式で行われ、競争ならぬ「共走」によって、各プロジェクトが成長していったユニークな試みだった。研究は研究者が行うもの、という固定概念が強かった当時、市民研究という響きはとても新鮮に映ったようだ。まだ日本に市民という言葉が根付く前(もちろんNPOも存在していなかった当時)、市民に「ものいう市民」として力をつけてほしいという狙いを持ったコンクールであった。

今回、本コンクールの第1回〜5回の評価を実施し、その後、6回、7回のコンクールではアソシエイションとして、身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」(1979年〜1997年、全7回)を取り上げる。本プログラムは、助成形態としては珍しいコンクール形式で行われ、競争ならぬ「共走」によって、各プロジェクトが成長していったユニークな試みだった。研究は研究者が行うもの、という固定概念が強かった当時、市民研究という響きはとても新鮮に映ったようだ。まだ日本に市民という言葉が根付く前(もちろんNPOも存在していなかった当時)、市民に「ものいう市民」として力をつけてほしいという狙いを持ったコンクールであった。

自分たちの活動を先行体験として新しい活動が生まれ、組織ではなく想いが引き継がれていくことの喜びを教えてください。このような動きは、20年経った今だからこそ見えてくる活動の波紋といえるだろう。萩原さんは「活動団体はいずれなくなってしまうにしても、そういうものが存在していたという事実は、記憶と記録の中に継続していつてほしい」と、記録することの必要性も強調した。

段階を経た助成の仕掛け、そして市民初のみちづくり基金の誕生

このコンクールは、ステップアップ型の助成であった。まず、「予備研究」といわれる活動を実施する。その成果を再度選考し、採択された団体のみが本研究の活動を継続するという流れであった。

「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」は、最優秀賞受賞後、さらにトヨタ財団によるフォロワーシップ助成(2000万円)という最終段階の助成を原資に、「公益信託函館色彩まちづくり基金」を設立した。これは日本初となる、市民による市民のためのまちづくり基金で、「函館からトラスト」(<http://www.hnshou.com/kara>)

よいものはよい、
おかしいことはおかしい
——村岡武司さん



実を結ぶ、形に残るような
活動に助成したい
——河内昌子さん



市民と行政が
お互いに高め合うことが
重要になってくる
——山本真也さん

ト・プログラムオフィサーとしてプログラム運営にかかわった萩原なつ子さん(現・立教大学社会学部社会学科教授、21世紀社会デザイン研究科教授)と、そのゼミ生である岡田真一郎さんに写真撮影などでご協力いただき、取材を行った。20年前、ちょうど萩原さんが私や岡田さんの年齢のときに運営していたコンクールを共に振り返る作業は、過去や未来にタイムスリップしたような感覚に陥りながら、話の尽きないものとなった。

美しく変えるエネルギーと

美しさを変えない精神を養いませう。

【建学のこころ】じろじろ大学 村岡学長の言葉

「見る」から「触れる」その「ひまわり」へ

まず最初に訪ねたのは、「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」である。この団体は、函館のペンキ塗りの建造物に関心を持ち、見て触れるうち、建物の壁を紙やすりでこすり出すことにより、ペンキの層を浮かび上がらせるに至った。時代ごとに使われる色が変化していった様子を明らかにし、それを、「時層色環」と名付けた。日本各地で開発が進み、新しい建物が次々と建設される中、ペンキ塗りの建造物に価値を見出し、第5回の市民研究コンクールでみごと最優秀賞を受賞した。

20年経った今、引き継がれるもの

元町倶楽部の中心メンバー村岡武司さんに、活動開始から20年たった今、組織を継続していくことに関して伺った。かつて自分たちが活動する姿を見てずっと何かしたかったと思う人物が、現在函館で盛り上がっている「バル街」を企画・運営しているという。

「函館からトラスト」は助成開始後まもなく、低金利のため設立当初の計画が実行できなくなった。寄付集めや助成金額の縮小などの努力を試みたが、2003年の第10回目から、その当時の多くの基金と同様に元本取り崩しをやむなくされて現在に至っている。20年で20回、残る4回の助成をどのように行うかについて中心となって運営に携わってきた事務局代表の河内昌子さんは、これまで以上に「実を結ぶ、形に残るような活動」に助成したいと言う。打ち切りが決定しているものの、これまで函館の市民によるまちづくりに助成し、着実に市民の力が付いてきたことを実感していると話す河内さんの表情はとても充実していた。

「函館からトラスト」は今

「函館からトラスト」は助成開始後まもなく、低金利のため設立当初の計画が実行できなくなった。寄付集めや助成金額の縮小などの努力を試みたが、2003年の第10回目から、その当時の多くの基金と同様に元本取り崩しをやむなくされて現在に至っている。20年で20回、残る4回の助成をどのように行うかについて中心となって運営に携わってきた事務局代表の河内昌子さんは、これまで以上に「実を結ぶ、形に残るような活動」に助成したいと言う。打ち切りが決定しているものの、これまで函館の市民によるまちづくりに助成し、着実に市民の力が付いてきたことを実感していると話す河内さんの表情はとても充実していた。

革新的だった「協働」

続いて、行政の職員という立場から元町倶楽部の活動に携わっている山本真也さんにお話を伺った。萩原さんいわく、今でこそ当たり前となっている「協働」や「官民の連携」だが、当時は、役所職員がまちづくりに加わることは、出世をあきらめたも同じことだったのだという。まちづくりという言葉の持つイメージも現在とは違っていたのだろう。その山本さんが、現

在は函館市都市建設部の部長になっていた。社会がこのような人材を必要とする時代に変化したといえよう。当時も今も、自分の気持ちとしては行政からは離れた、個人というスタンスで活動をしていると即答した山本さん。しかし「見られ方」という面においては、行政の人間としての立場は忘れてはいけない。そして行政には行政としての大事な役割がある。市民と行政がお互いを高め合うことが今後ますます重要になってくると語ってくれた。

この函館の事例のように、行政や専門家も一市民として活動に取り組む様子を目の当たりにし、第6回のコンクールから募集要項の趣旨文が「市民と専門家が一緒になった研究」から「専門家も一市民として研究」へ修正されることとなった。わずかな差に見えるが、興味深い変化である。

まちづくりは旅に似ている

動きながらいろんな人や情報に出会い

その過程の中で「価値や豊かさを紡いでいく

トーマスの町、岩見沢

次に訪ねたのは、第7回（1997年）の市民研究コンクールで研究奨励賞を受賞した「岩見沢の鉄道復興を考える会」。1993年、かつて鉄道のまちとして栄えた岩見沢の廃線跡で、子どもが「ここでトーマスみたいな機関車が走ればいいね」とつぶやいたことに端を発し、「鉄道」を軸としたまちづくりが始まった。街の記憶を調査・分析するという活動の他に、7インチのミニチュアではあるが、作りは本物の蒸気機関車をイギリスから取り寄せ、その機関車トーマスとともに、子どもだけでなく大人たちにも夢を与えるイベントをたくさん行ってきた。私たちが訪ねたまさにその

将博さんが後継者として、トーマスを看ている。その話の中で考えさせられたことは、情熱だけでは埋めることができない技術力という問題だ。人の思いを継承していくとともに、文化をつなぐ技術力の継承。そこにも大きなポイントがあることを学ばせてもらった。

ふすま絵と選考委員

トーマスハウスと名付けられた集会所を訪れると、活動内容が書き込まれた模造紙や、活動写真が所狭しと壁に貼られている。その中でもひととき目を引くのが、ふすまに墨で直接描かれた絵。実は、コンクールの選考委員をつとめた赤瀬川原平さんと延藤安弘さん直筆の絵だとのこと（左の写真は赤瀬川さんのもの）。このコンクールは、選考委員の面々を公開とし、各地の団体を訪ね歩き、選考委員自らが応援団として声援やアドバイスを送った点が非常にユニークであった。インターネットが発達していなかった当時、選考委員が現地視察に訪れたり、メディアがその様子を取り上げたりすることで、無関心だった周囲の人々が見方を



文化をつなぐ
技術力の継承を
——松井将博さん



人との出会いが
いつも次のステップへ進む
きっかけを導いてくれる
——瀬尾慶雅さん

なによりも、
情熱のある「人材」が重要
——橘宜孝さん

日も、会のメンバーは次なる企画で盛り上がっていた。

この岩見沢の鉄道復興を考える会の中心人物である瀬尾慶雅さんも、行政の人間でありながら一市民として活動を行ってきた1人。瀬尾さんも純粹に市民活動をしたきたと強く語ってくれた。活動開始から20年近くたった今になって感じることは、偶然か必然か、人との出会いがいつも次のステップへ進むきっかけを導いてくれ、時間がたつにつれていろんなことが次から次へと見えてきたことだと言う。そのことを端的に示しているのが仲間です。話し合ううちに生まれた冒頭の言葉に表れている。コンクール終了後も、次々と岩見沢に根差した活動を地域内外で繰り広げていた。

課題をあげてくれたのは瀬尾さんとともにこの会を盛り上げてきた橘宜孝さん。橘さんは「人材」の重要性、情熱について「火付きの良さ」という言葉を使って話してくれた。情熱のある人間がもつたら、もつと違っていたらどうだろうと。それに対し、瀬尾さんも、材料・歴史がたくさんあることで昔に戻りすぎてしまう。今、何をすべきかを考えて動ける人が少ない、と橘さんの言葉を受けた。長年の活動を通じて見えてくる課題に対し、前向きに意見交換することも大切なのである。

技を継ぐとついで

その後、私たちは7インチの機関車トーマスの見学へ。現在、トーマスの管理をしているのは松井将博さん。トーマスが岩見沢に来た当時、扱い方がわからないまま操作したため壊れてしまったトーマス。汽笛を聞きつけて、声をかけてきたのが松井さんのお父さんであった。近所に住む顔なじみの松井さんが、実は鉄道に精通した技術者であると知ったことで、岩見沢の鉄道復興を考える会は大きく進展する。地域に存在する隠れた専門家の重要性である。今は、息子である松井

変え、社会的な認知度が高まるという効果もあったという。

温故知新

今回の取材を通じて感じたことを2点。

本来の温故知新の意味とは違うが、メンバー同士がしっかりと意見交換をし、お互いを理解したうえで共有している価値観、そうしたうえで成り立つ人の「温かさ」を強く感じる事ができた。温かさという点では、助成対象者との物理的距離は離れていたけれども、心の距離は近かった、という萩原さんの存在を忘れてはならない。担当していた当時から20年あまりが経過し、トヨタ財団職員ではなくなった現在でも、現地の方々との縁が続いていることは、立場を越え、愛情を持つてかかわってきたことの現れだと言える。今回は、つながること、継ぐ（想い、技）ことのいろいろな形を見た取材となった。

トヨタ財団による市民研究コンクールの存在について、元町倶楽部のメンバーの1人、太田誠一さんは、当時としてはスケールの大きな思いきつた助成のおかげで、全国規模、世界規模でものごとを考え、それを自分たちの暮らす地域で実践することができたと言った。翌日の取材で、まったく同じことを岩見沢の瀬尾さんも口にしたのは偶然だったのだろうか。この言葉と、函館、岩見沢の事例から、センスとタイミング、そしてそれを後押しする資金（試金）がうまく合わさった時、よい活動が生まれるのではないかと感じながら、北海道を後にした。

ふたつのグループは、今もなお前向きに自分たちにとつての身近な環境を見つめ、新しい風を起こし続けていた。故きは温かくその知は今も新しい。そんな新しい解釈もよいかもしれない。

活動地へおじゃまします!

●訪問先
立命館大学
地域情報研究センター (代表: 鐘ヶ江秀彦)
(2008年度研究助成プログラム助成対象者)
【助成題目】「バイオマス炭化物によるCO₂発生抑制」を通じた都市部から農山村部への資金還元モデル設計—ポスト京都議定書を見据えた排出量取引、農産物エコブランド化、エコポイントとの連携を通じて

●訪問者
めざまみの里協議会 (代表: 小松誠一郎) 高橋 勝
(2006年度地域社会プログラム助成対象者)
【助成題目】ひまわり家族認定制度による環境と共生した暮らしづくり



助成対象者同士が意見交換

最先端農法で炭が地球を救う!?

●取材・執筆: 高橋 勝

いや出発! しかし不安だらけ……

私の住む山形県飯豊町は、80%を森林が占める日本の原風景のような典型的な町である。主要作物は、水稲に畜産(米沢牛の4割出荷)、アスパラとなっている。私も農業で生計をたてようと頑張つて(もがいて?)いる。

そんな中で「飯豊町めざまみの里協議会」という組織がある。「めざまみ」とは、フランス語からの造語で「親しい」とか「仲間・友達」という意味で、簡単に言えば「地域活性化協議会」といったところだろうか。この会の基本理念は「環境と経済の好循環」である。町が一丸となって地域循環社会の構築に取り組むための推進役でもある。私も会員として参加している。

具体的な活動としては、「ひまわりを育てて除雪機を動かそう」プ



亀岡駅に隣接する小麦畑に設置された看板(右が筆者)。

産学官の連携でデータ(数値)を計測し、エコビレッジ構想(バイオマスタウン)の最終形である「ゴールのビジョン」, 目的を達成する為の手段を明確に示せるようにとアドバイスを受けた。

次に柴田さんから、「バイオマス炭化物によるCO₂発生抑制を通じた都市部から農山村部への資金還元モデル設計」のことをお聞きした。研究概要は「農山村部で地域バイオマスの炭化物を農業利用することによって埋設・炭素隔離を行い、その見返りとして都市部から農山村部に資金がながれる新たな仕組みを設計し、その実効性を検証する」とのこと。頭を抱える私。

まず「カーボンニュートラル」の先をいく「カーボンマイナス」。カーボンニュートラルが「地表循環炭素」に対して、カーボンマイナスは「炭素隔離」。地中貯留・海洋隔離を行うことだった(この取り組みでは地中貯留)。地域未利用廃棄バイオマスを炭化(無機化)し、堆肥と混合して炭化物を物理的利用(肥料)で炭素隔離(地下蓄積炭素量の増加)を行う。これが「炭素埋設農法」だ。さらにCO₂排出権が不足する企業へ「カーボンクレジット販売」を行う。CO₂排出権取引のこと。そこで生産された農産物を「クールベジタブル(地球を冷やす野菜)」として5~10%の価格を上乗せし販売する(案)

聞くうちに「なるほど! 納得!」と頭も気分もすっきり。「炭素埋設農法」の虜になってしまった。しかしまだ課題もあるそうで、CO₂排出権が不足する企業へのキャップ(規制)を国がはっき



地域未利用廃棄バイオマスを堆肥と混合させる。

プロジェクト。耕作放棄地(または庭先)にひまわりを栽培し、回収した種から食用油を搾り出して利用し、廃食用油はBDFとして地域内の冬の除雪機(農機具)へ活用するという取り組み。「経済とエネルギー資源を地域内で循環するシステムの構築」が活動の原点である。その中には「カーボンニュートラル」の考えもあり、農業活動でCO₂は排出するが、農作物が吸収してくれて「プラス・マイナスゼロ」で「これでよし!」と、満足? していた。京都ではもつと先をいっているなんて、東海道新幹線の車中では想像もつかなかった。

画期的な農法に感動感銘、「クールベジタブル」の虜に!

今回案内していただいたのは、立命館大学の柴田晃・産官学コーディネーター。亀岡市内でトヨタ財団からの研究助成プログラムで実証実験を進める中心人物である。京都駅近くのホテルで合流し、立命館大学衣笠校へと車で向かった。会場には、立命館大学地域情報研究センターの鐘ヶ江秀彦センター長(政策科学)と学生3人がいらして、午前中は双方のプログラムを紹介し意見交換を行った。

まず私から自身の活動を紹介し、鐘ヶ江さんから色々アドバイスをいただいた。わが町で建設中の木質バイオマス利活用施設。採算性、需要と供給のバランス、燃料としての供給体制、雇用の場など各方面について意見交換を行った。着眼点として「エネルギー収支」があること。結局は、できるだけエネルギーを使わないこと、移動距離を使わない(縮めること)が、「エネルギー収支」をよくすることにつながる。この視点から町の「木質バイオマス利活用施設」を検証してみてもどうかと意見をいただいた。

また、私たちの飯豊町のよう「寒い地域の中山間地域」の方が環境に配慮した生活をしやすいとも言われた。それは自然エネルギーを効率よく使えるからとのこと。小電力発電(水力)やヒートポンプ、太陽光などを使うにして



双方の活動紹介と積極的な意見交換が行われた。



実際の生産者に実験圃場を案内していただいた。

り示さないと、このシステム内のCO₂排出権取引の部分は完結しないとのこと。何かを始める、開拓、創設(言い出しっぺ)には、パワーと情熱、そして仲間たちの必要性を感じた。

午後は亀岡市に移動し、現場をみることになった。早速、生産者(保津町の農業法人)の方と合流し小麦、水稲、ねぎの実験圃場(炭堆肥の投入量による収穫量の違いをみる)をまわった。私が訪ねた時(4月下旬)には小麦も成長し穂が実っていた。話をきくと昔の一体は「保津小麦」の生産が行われていたそうで、現在は外国産の低価格小麦の輸入で採算が合わず、栽培をやめてしまった農家が多く出たとのこと。この炭肥料で「保津小麦」の生産が最盛期のように復活すれば、地域にとっても生産者にとっても大きな喜びになるだろう。そしてこの「炭素埋設農法」が新たな農産物への付加価値となる日が近いことを私は確信した。

やはり「人」が大事! 終わりになき旅はつづく……

最後に亀岡市役所を訪問し、お話をきくことができた。その中で担当者からの言葉が印象に残った。「都市近郊型農業では担い手が育たない」というのだ。理由は、「ここ亀岡市は、京都市内・大阪市内が通動圏で農業に頼らなくても仕事場がある」とのこと。私は「京野菜というブランドがあるし、大消費地が近く有利かと思っていた」と担当者に話したが、「必ずしもそんなことはない」と言葉を返されてしまった。少しショックを受けながら最後の取材を終えた。

帰りの新幹線の中、いろんな思いを胸に山形に向かった。この取材で、「炭が地球を救う」という最先端の農法を目の当たりに感銘を受け、「担い手不足」に自分をも奮い立たせてもらった気がした。また地元へ帰り、農業—食料—環境のつながりを通じた事業を展開できればと強く思った。そのためにも「人」とのつながりを大事にし、未来に向けて歩き出す決意をした。

OPINION

トヨタ財団と文化について



●権 修珍
(トヨタ財団
プログラム
オフィサー)

トヨタ財団は、「人間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資する」という理念のもと、1974年に設立された。以来、多様な分野への助成を実施してきたが、その多くは、福祉社会の基盤としてのさまざまな文化活動を対象としている。そこで今回は、文化をキーワードに過去を振り返り、今後のあり方を考えてみたい。

これまで、トヨタ財団は以下の点を重視して助成を行ってきた。

- 文化として固有性があり、助成する意義があるもの。
- 時間経過、自然災害、紛争などによる緊急性が問われるもの。
- 共存・継承につながる持続性があるもの。
- 地域への還元度・寄与度が高いもの。
- プロジェクトの成果をできるだけ多くの人々が享受できるもの。

これらの助成の背後にあるのは、文化を通じた相互理解の実現と深化である。文化は、国や地域、世代を超えた相互理解の共通基盤になりうる。このような認識が、設立初期から現在まで、トヨタ財団の助成内容には色濃

く現れていると思う。

その一例が、1978〜2003年度に実施された「隣人をよく知ろう」プログラムである。そのきっかけになったのは、東南アジア現地調査を行っていた国際部門スタッフより「日本の文化をアジアに伝えるだけでなく、アジアの文化を日本に伝えたい」という報告である。このプログラムによって、東南アジアの小説や民話が翻訳され、日本語や東南アジア言語を持つアジアにおいて、文化を通じた相互理解、とくに日本人の東南アジアへの理解度を深めたことが評価されたプログラムである。

また、2005年度に開始した「アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」(2009年度からは「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」)プログラムは、文化の消失とたたかいてある。経済重視の地域開発や政治状況、自然災害などにより、助成の対象となる伝統文書の保存状態は必ずしも良くない。また、その価値が正當に評価されていないため、発掘されてもそのまま放置されることも多い。その際、時間経過、地域情勢といった周辺環境と良い距離を保ちながら、研究者や地域住民が伝統文書の保存作業にいかにか効果的に取り組み、社会へ発信していくのが重要となる。地域文化のよりどころである伝統文書の保存や活用、次世代への継承に取り組みプロジェクトを支援することで、語りうる固有の文化を再生し、相互理解を通じて少数民族のアイデンティ

ティを確かなものにできればと願っている。

トヨタ財団は現在、研究助成プログラム、アジア隣人プログラム、地域社会プログラムという3つのプログラムを通して、さまざまな取り組みを支援している。たとえば、タイにおける壁画保存のように、一ヶ国や地域での取り組み。また、東南アジア諸国間の文化理解に向けた陶芸コミュニティのネットワーク構築のような、国境を越えた形での取り組みなど、多種多様なプロジェクトに助成を行っている(詳細は財団のウェブ・サイトを参照されたい)。

文化活動への助成は、成果を上げるまで、他に緊急な課題があるのではないかと指摘されることもある。しかし、不確定・不安定といわれる今日こそ、文化活動への助成は重要であると考えられる。財団の果たす役割として、より良い時代を迎えるため、長期的、かつ世界的視野のもとで、その基盤づくりとなる活動に助成すべきであろう。また、人は誰もが、文化を享受できるコミュニティで暮らし、それを次の世代にも伝えたいと願っている。また、異なった文化を理解することで、不安を解消するとともに選択の幅を広げたいと願っている。今後もトヨタ財団が文化活動をしつかりと支援できるよう、スタッフの一人として努力していきたい。

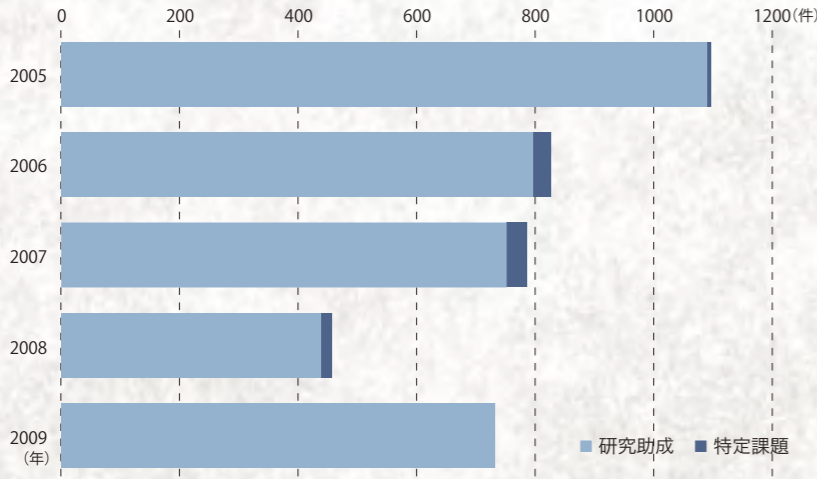
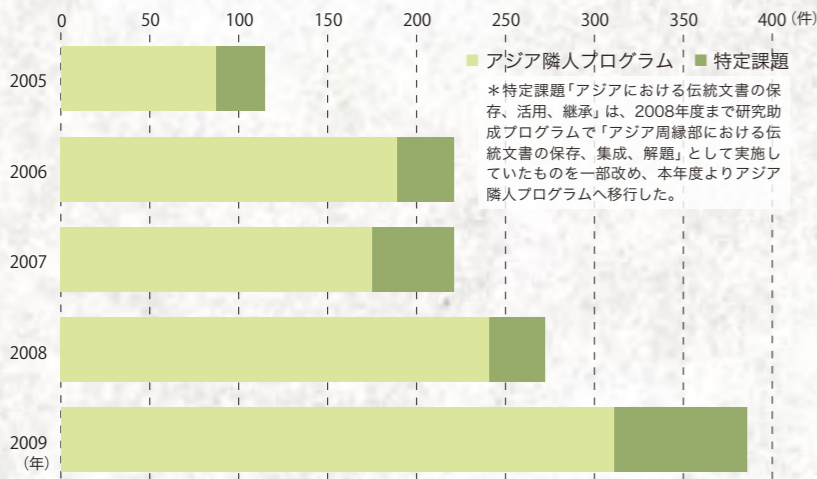
*本原稿は2009年1月18日に開催された「私の文化遺産再発見——文化遺産を通じて国際貢献を推進するシンポジウム」(主催:文化庁、文化遺産国際協力コンソーシアム、朝日新聞社)で発表した内容を加筆・訂正したものです。



INFORMATION

2009年度 アジア隣人プログラムと、 研究助成プログラムの 公募状況

アジア隣人プログラム(含むアジア周縁部における伝統文書)および研究助成プログラムの応募を5月13日に締め切りしました。応募件数はアジア隣人プログラム313件、特定課題「アジア周縁部における伝統文書」75件、研究助成プログラム734件の合計1122件となりました。全体的に応募件数が増加しただけでなく、海外での公募活動に力を入れたこともあり、海外からの申請が顕著に増えました。これから選考委員会による審査を経て今秋の理事会で最終的に助成プロジェクトが決定されます。





ばがー島のわらべうた

- 発行：児童文化サークルくにぶん木の会
- 発行日：2009年2月
- 価格：1500円
- 問い合わせ先：くにぶん木の会 池田哲子
- [E-mail] itutomn@woody.ocn.ne.jp

ばがー島とは、石垣島の方言で「私の島」という意味。本冊子は2007年度地域社会プログラムの助成を受け、「ばがー島の文化」を子どもたちに受け継いでいきたいとの思いから「くにぶん木の会」により刊行されたもので、石垣島に伝わるわらべうた55曲が紹介されている。

本冊子にはCDが付いており、じっさいにそのうたを耳で聴くことができる。音源は石垣島白保村で1972年に録音されたものが使用されている。わらべうたを歌える人が減少し、方言をしゃべれない世代が増えるなかで、きわめて貴重な記録であり、未来へ受け継ぐべき大切な資料である。



市民ファンドが社会を変える

ぐらんが紡いだ100の物語
奥田裕之・牧田東一ほか 著

- 発行：コモンズ
- 発行日：2009年2月5日
- 価格：1600円+消費税
- 問い合わせ先：〒161-0033 東京都新宿区下落合1-5-10-1002 コモンズ

サブ・タイトルにある「ぐらん」とは、「市民による市民のための助成の仕組み」である草の根市民基金・ぐらんのこと。本書は、そのぐらんの船出から現在までの歴史、ぐらんが助成した団体の成長の記録、日本の助成金制度との比較のなかでのぐらんのオリジナリティなどが紹介されており、NPOを育てていくために市民・企業・地方自治体・国ができること、なすべき役割を具体的な提言としてまとめている。

本書は、草の根市民基金・ぐらんという助成制度を通して、市民一人ひとりの小さな力が社会を変える大きな力になることを実感できる、実践的参考書といってもよいだろう。



市民力による知の創造と発展

身近な環境に関する市民研究の持続的展開
萩原なつ子 著

- 発行：東進堂
- 発行日：2009年1月10日
- 価格：3200円+消費税

著者の萩原なつ子さん（現在、立教大学教授）が、かつて企画・運営に関わったトヨタ財団「市民研究コンクール“身近な環境をみつめよう”」を通して、「地域力」を高めるための要となる「市民知」の重要性を浮き彫りにした好著。

市民研究コンクールは、1979年から1997年にかけてトヨタ財団が7回にわたり実施したプログラムである。地域住民が行政や専門家との協議を進め、問題解決に至る過程を助成し、すぐれたプロジェクトを表彰したもの。本書には、市民のための市民による新たな「知」の地平をひらくものとして、市民力の重要性が豊富な事例とともに紹介されている。（市民研究コンクールについては、本誌P.20「温故知新」を併せてご覧ください）

本書の出版に合わせ、3月25日東京の国際文化会館にて「地域社会のエンパワメントを考える集い」が開かれた（主催トヨタ財団）。著者の萩原さんおよび市民研究コンクール関係者をはじめ、市民活動関係者、トヨタ財団メンバー（職員／OB）を交えたなごやかな雰囲気



挨拶を述べる萩原なつ子さん

のなか、本書が成立するまでの経緯や今後の地域社会のあり方などをめぐる話題で盛り上がり、親交を深めることができたことを記しておきたい。

BOOK REVIEW

出版物のご案内

助成プロジェクトに関連した書籍を中心に、話題の本を紹介します



地域におけるNPOの実践から見る次世代育成支援

—行政・NPOの協働の将来像—

- 発行：特定非営利活動法人 MIYAGI 子どもネットワーク
- 発行日：2009年3月
- 問い合わせ先：〒981-0954 仙台市青葉区川平1-16-5 スカイハイツ102 特定非営利活動法人 MIYAGI 子どもネットワーク
- [URL] <http://miyagi-kodomo.net/>

MIYAGI子どもネットワークは、文部省・厚生省・労働省・建設省（当時）がまとめた「今後の子育て支援のための施策の基本方向について」（「エンゼルプラン」1994年）の問題点をさぐるため、宮城県内で子どもに関わるさまざまな活動を行ってきた女性10名により設立された。この冊子は、2008年、当ネットワークの設立10周年を記念し、これまでの活動の記録と展望をまとめたもの。

つねに子どもと、子育てをするお母さんたちに寄り添いながら活動をつづけてきたMIYAGI子どもネットワークの記録は、子ども・子育て支援という範囲を超え、NPOと行政が協働するさいの課題を考えるうえで、さまざまなヒントを提供してくれる。

トヨタ財団の主な活動記録 DIARY

トヨタ財団の主な活動記録

2009(平成21)年1月1日～6月30日

1月5日(月)	東南アジア研究地域交流プログラム 選考委員会(インドネシア・バリ)	4月18日(土)	地域社会プログラム贈呈式
1月20日(火)	地域社会プログラム選考委員会	4月19日(日)	地域社会プログラムワークショップ
1月28日(水)	第4回プログラム改革委員会	5月9日(土)	地域社会プログラムワークショップ(大阪)
3月9日(月)	第2回ビジョン懇話会	5月13日(水)	アジア隣人プログラム、研究助成プログラム公募締め切り
3月17日(火)	第125回理事会、第43回評議員会	6月1日(月)	アジア隣人プログラム選考準備会
3月20日(金)	アジア隣人プログラム、研究助成プログラム公募開始	6月8日(月)	第126回理事会、第44回評議員会
4月11日(土)	アジア隣人プログラム、研究助成プログラム公募説明会	6月13日(土)	研究助成プログラム選考準備会

筒井 功

(2006年度研究助成プログラム助成対象者。本誌 P.18参照)



タイ・ラチャ島にて Photo by Isao Tsutsui

水牛たちの昼下がり

刺すような日差しが降り注ぐ。海からやって来たそよ風がヤシの葉をゆらし、
わずかばかりの葉音が辺りに届く。
時間が止まってしまったかのような、そんな小さな島の昼下がり。
ひと仕事終えたばかりの水牛たちが、沼でのんびりと過ごしていた。
ここには人と生きものとの密接な関係がある。

*このコーナーは助成対象者からの投稿によって構成されています。

応募方法の詳細はトヨタ財団ウェブ・サイトの「お問い合わせ」フォームよりお問い合わせください。



6月5日(曇り)編集会議の日に、オフィスの窓から

編集後記

● 西新宿にあるトヨタ財団オフィスの自席後方の窓から、池袋、大宮、晴れた日には遠く筑波山までが見渡せます。関東平野の広さを感じる時でもあります。昨年は前職で中国地方を担当し、瀬戸内海と日本海に迫る中国山脈の狭間に街並みが点在する風景に接しました。その風景のなかには、多くの人々の日々の生活の営みから立ち上る息遣いさえ感じ取ることが出来ます(残念ながら秀麗富士を臨むことはできませんが……)。

生活のそれぞれには無数の悲しみや喜びが存在し、人々は苦悩や辛さを乗り越え、必死の思いで幸せを求め生きている。

今号の特集では「地域社会プログラム」を特集しましたが、そんな日々のくらしのなかで心の豊かさをいかにして実現することができるかが、このプログラムの大きなテーマのひとつになります。財団の活動を通じて、この美しき日本に誇りをもつ人々の、心の豊かさから湧き出てくるような温かな笑顔があふれる国であってほしい、ささやかながらでもそのお役に立てることをしたいという願いをこめて、この特集の企画・編集に取り組みました。

それは日本に限ったことではありません。次号

では、財団設立以来取り組んでいる、われわれの隣人アジアでの活動のご紹介を中心に特集する予定です。(A.N.)

● 昨年から新広報誌の刊行に向けていると議論を重ねていましたが、作業は遅々として進まず、後髪をひかれる思いで9月半ばから産前休暇に入りました。11月にわが子を出産し、今年の4月に職場復帰しましたが、財団にとってのわが子ともいえる新広報誌はまだ生まれれておりませんでした。

しかし、スタッフの協力により、ゆっくり、着実にその時に向けて準備が進んでおり、このたび無事この世に生を受けることができました。この赤子ともいえる広報誌を財団だけではなく、財団を取り巻くコミュニティで、コミュニティとともに育てていきたいと思えます。(M.S.)

● ● ● 今回、かつての助成対象案件を取材しに北海道へ足を運びました(↓20ページ「温故知新」)。いつもは助成中の方とのかかわりが多い中、助成

から10年、20年が経過した方々に会い、みなさんの活動が人生とともに地域に刻まれていることを実感したのでした。

また、初めて広報誌の制作に携わり、財団のプログラム全体を見渡して企画を練る楽しさを味わいました。難産だっただけに愛着のわく一冊です。(M.S.)

● ● ● しあわせ(幸せ、幸福)は「仕合わせ」とも書きます。仕、合わすこと。つまり、多種多様な事柄や人と人が合う(会う)ようにしあう(仕合う)ことがしあわせなのだ、というある哲学者の言を肝に銘じ(それって、まさに「編集」!)、日々の企画・取材・編集作業に動んでいきたいと思います。

言葉遊びめいていますが、いうまでもなく、本誌自体が多くの人々との「仕合い(出会い)」と「協働」によってつくられています。個々のお名前をあげることはできませんが、ことに執筆や取材に快くご協力いただいたみなさまに、この場をかりて心よりお礼を申し上げます。(三)

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブ・サイトの「お問い合わせ」フォーム、あるいはファックスでご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.1

発行日 2009年7月14日
発行人 加藤広樹
編集人 野々宮彰彦

発行所 財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <http://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



THE TOYOTA FOUNDATION

<http://www.toyotafound.or.jp/>

JOINT No.1